俳諧七部集

後猿蓑

四

イ 4
3157
23(4)

續猿蓑集巻之上

八九間空て雨降る柳かな　芭蕉

春のからすの畠ほる声　沾圃

初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧

内はどさつく晩のふるまひ　里圃

きのふから日和かたまる月の色　沾

狗脊かれて肌寒うなる　蕉

14
3157
23
(4)

渋柿もことしは風に吹れたり　里

孫が跡とる祖父の借銭　莧

脇指に替てほしがる旅刀　蕉

煤をしまへばはや餅の段　沾

約束の小鳥一さげ売にきて　莧

十里ばかりの余所へ出かゝり　里

笹の葉に小路埋ておもしろき　沾

何ぞ渡とつなぐ門の蓋つけ　蕉

荊くゞる垣ねは浅き鶯も　里

やつしやつれに京のさつれ　莧

丸腰におもひつく花のさかりあびて　蕉

見るまにころぶ物のたく口　沾

妻持は寒きお川薄れり猶まだ　莧

伊勢の下向に随つれだつと遊　里

長旅の小挙能伸びてそれし　沾

くゆるまゝ空の晴れたるまゝ　蕉

禅寺に一日あそぶ砂の上　里

槲の角乃ちてぬ貴完　莧

後むしの牛に借着をたのふや　蕉

かられぬ娵はもらす内證　沾

月待に傍輩衆のうちそろひ　莧

籬の菊の名を書添し　里

はれて来て蕎麦も椿もさむくのぼり　沾

伴僧はしる駕のわき　蕉

削(ソグ)やうに長坂の冬の風　里

よ所さに置のこたつを移る　莧

引立て帷子に綿出す寺ほやさ　蕉

ちりと火入に押もれ葉　沾

花見とてや鍬ぬ菓のひやくされて　莧

潮かしらのちるかげろふの影　里

馬莧

雀(カラ)の字や揃ふて渡る鳥の数　沾圃

てりはの岸のおもしろき月　里圃

立家を買て移れし秋暮て　莧

鴨川しばしかるゝのゆく月酒　沾

霊照寺まへ無常のかなしみも又六人　里

遠きあるいての洗足

海しきれる家の一歩のんきさかひ　莧
清惜きんてむすふありさる　沾
あまささ流茶花の気候くし　里
名明りきくさる国 方乃客　莧
何事もなくてめてたし紀の道　沾
風ふくめすかる木橋の燈の月　里
養所 秋の行所を行えて　莧
旅宿のたつまと 妙房呼ぶ　沾

明きつる伊勢の芦洲のかし蘇り　里
業色きさく紀かうぬ一陣　莧
信楽もきかりて露き花盛　沾
東ら静かなる竿乃深纜　里
営の御みえ雪に掃緒し　莧
来なる合点て払ふてなる　沾
手しにたちる紀をも中ふく　里
三蹟鞍馬の花のさかりや　莧

汁の実にこまる茄子のお盡て　沾
あらし麦をも川刈てと來　里
乙しに寺の指圖をも出し　覚
扇の和歌乃やさしき　沾
隣りてゆきされつる小商　里
耳たしてそよよい新埋ふ　覚
肌入て秋になりけり盆の月　沾
影よこたふるる笹の露　里

けさ盆を寶の母と向て　覚
子付て切ね羽乃衣　沾
車のきれさ帷子附のまひ扣　里
時て気味よき杖笛の風　覚
花のうけ栄ひ立雑子の藤くり　沾
あら国の土のかうくりけろふ　里

はさゝ立鷺引すゆる山嵐に菊　里圃
冬のまさ椎の霰なくし飛　沾圃
大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉
上下ともに鰹菜の出来　馬莧
断切に月見の集が誂　沾
蕎らちらしとゐる留守　里

秋見殿の野分も鳴極りて　莧
陀らし紀楼も楓わかやく　沾
姐の鐘にみそさへつけなくし　里
月剥て宗全よれ落しかり　莧
牧翁を縦河の兎卿積とりて　沾
まることも川にもやすねりの紙　里
筆の露ふよくれわるの泥ちまり　莧
俘弱氣つゝふ締とりの面　沾

うき旅も聴とつれ立海り鳴　里
を昵そらし昵をつるそゝく　莧
呉舟の花の中より漕つとめて　沾
梅の傍へ門をきらてゆり　里
百姓になりて世にも栄さよ　莧
こまめんを膳のあしめには葉　沾
責抽の法鉢はゝおろし垂　里
ろかのあつまるそくめりともきね　莧

猫をさへ蘇の中乃絡線のおす　沾
おもき人々はひともちそ泣　里
火燵の火いけて携手鼓持所やしを　芭
一石ぬらし雁乃来　沾
折しも寒月の影さし入れ　里
御に加減乃ちらちらわかさ　芭
肩ぬきてとしよりもつ吹てそろ　沾
おもひのまゝにふ振て居寝かく　里

手拂に娘をやつて娘のさゝ　芭
三家の兵をとゝちて仕舞　沾
花のあと蹴鞠のはさかれはしろい　里
寺のひけゝる山際の来ち　芭
冬よりもちらつかく流れ池の鴨　沾
一面降てあれくる風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃

日は寒けれど静なる岡　芭蕉

水かるゝ池の中より道ありて　支考

篠竹まじる柴をいたゞく　惟然

鶏があがるとやがて暮の月　蕉

通りのなさに見世たつる秋　考

盆じまひ一荷で直ぎる鮨の魚　然
昼寐の癖をなをしかねけり　蕉
聟が来てにつともせずに物語　考
中国よりの状の吉左右　然
朔日の日はどこへやら振舞れ　蕉
一重羽織が失てたづぬる　考
きさんじな青葉の比の樅楓　然
山に門ある有明の月　蕉

初あらし畑の人のかけまはる　考
水際光る浜の小鰯　然
見て通る紀三井は花の咲かゝり　蕉
荷持ひとりにいとゞ永き日　考
こち風の又西北になりにけり　然
わが手に脈を大事がらせて　蕉
後呼の内儀は今度屋敷から　考
喧嘩のさたもむざとせぬ也　然

大せつなはる二日ある暮の鐘　蕉
雪くさかし中の宮居　考
東路の衆掛る皆御家流　然
奥の世無事を人の悦　蕉
酒よりも肴のやすき月見して　考
赤鶏頭を庭の正面　然
くゝね嫁のころしれ出川流　蕉
霧河のとはると船さかの音　考

鳥籠をはらさと松尾松の風　然
大こつらひの奥の字伸る　蕉
米搗もなかまよりよて鳴るや　考
うしろめて市の中を押あふ　蕉
けあくら浄土花のけもなくて　然
鴨の油のまことぬけ然末云　考

今宵賦

野盤子
支考

今宵は六月十六日のそら水にかよひ月は東方の乱山にかゝげて衣裳に湖水の秋をふくむされば今宵のあそびはじめり尊卑の席をくゝすやきあいし敵てこゝら旅人ところしに涼みして野ぜ里ひら殿おもふきはめしかゝりかは人々さゝれ人を與とし悦ばされあゝ孫を姿

なからに余のめくみをかうむれる嵯峨
のみねのさくらひらの雪をさへ見しるき
見に来りける河原は鴨川の流れ落る比四
季の景秋をうち捨てゝてらしいさよ月
さゝきのあかいを得りて伊賀の山中へ
父母の在墳をとむらひ洛の嵯峨に
猿猴して繁茂樹園の涼しみもきくよ
り夜かくてやけらに秋をまつれる庵に

思ふにさすか湖水の納涼もえたきれく
そてやまと三四里の雲を渡て家に草鞋の
膳をやく所に宵は暮泊供をいるし
として便あり便あり便にして便に似たる
その河よその文の河にそれにその石砂川の
岸に小松をうゑたるをとし流はるかに
すこし浪の川味なくして人にあふるく
すこし早手なつかしかりしくしのさし
ちさてひさまろにまかれやおのつからよ

ろくろを人の絲よりひておほへ次第
峰て月もかゝみなりやすして離客
此をいか度もたちやくの方へと心さしや
まれしを支考は路の方に行とも
おて時雨の比を古人のなとも都のなり
さしも湖のみちのやうてさゝしに立
わかれて此川のいかにをひにおもしろう残す手
のこ肯を暮のよく明手いいやこへさと
ら須冬の夜の宴何ぞいかうしさ給ちらん

そのころに酔て寝なそのあくるを罰盃の㪽
みなをのまきんとたそれあはぬ

秋の夜や崩て明し冷し物　芭蕉
露をとらふや蓮の根先　曲翠
鶯は芒の根に吸入て　川烏
たきさ華麗に交放柳しぬ　惟然
月影の雲もちらよる雲の色　支考
さらみて繰る紗かな　芭蕉

猿を待場の秋へ追かけし　圃
山くづれ多きとて池広　莧
殿様のある両桶にてもお出譲　然
鳶て工まをちらす照降　考
折から夏寿に続く椿の鳥　蕉
持仏のうちに夕日さし也　圃
平畦に葉を前立しおもさし跡　考
秋風ふくる門の広風呂　然

馬引て娘ひかる月の影　莧
尾張てつきしものゝ多なる　蕉
縁好のことし花に約れて　圃
初月ちらく襟もよごさ次　莧
春風に善積の壇もていそ寝や　然
霧ろし村人ねけるくしを　考
喰くさぬ鶴も鴨も口きいて　蕉
何その時も只休よかる　圃

笹はさき様に付たるきぬ着る　る
薮こいたる卯月のあそ　蕉
おもやく隣先みえ川尖木の町　兮
條の日和に雲の乱き　然
若こゝろ手綱をめ酒のむなし　翠
ゑかんの家をあへあつくる　る
封付し文箱来る月の影　蕉
そゝろしありく盃の上筋几　兮

虫籠つる四条の角の河原町　然
ゑる淋しあくる表一固　翠
冬のうちに跡を見らるく床椽の上　る
おやな清のうんよ守用る　然
尽たる飛のも扉押しよせて　兮
膝うけつくしても桜の下　高

續猿蓑集巻之下

春之部　花桜

温石のあかるゝ夜半やはつ桜　露沾

寝時分に又みむ月かはつさくら　其角

顔に似ぬほつ句も出よはつ桜　芭蕉

ちる道や木の股くゞる花の山　洞木

角いれし人をかしらや花の友　丈草

花散て竹見る軒のやすさかな　洒堂

富貴なる酒屋におはひて文君がれ吉も酔のまぎれに思ひそめし流にに

酒部屋に琴の音きく窓の花　惟然

賭にして降出されけり春の雨　支考

人の手も多く靏けし木川桜　治徳

かゝる日や野ら中の花の小屋　猿雖

七川より花みんと押せは女中哉　陽和

見る所物ふかくなるや木川桜　乙州

咲花をもつれしきなる老木哉　木白

家居や木あかるとも見えて木川桜　沾荷

二の眼やさくら隠の銅の鼻　子珊

篗屋の本方にかゝへし桜かな　卓袋

田家

蒟蒻の名物やさえん出る桜　李里

咲かゝる花や飯米又十石　桃首

山門に花さくのしし木の端より　一桐
なかれ木の根やあらはるゝ花の陰　如雪
花笠をきせて似合はん人もなし　其角
ちられやうに来床なき花の春　少年 一鴻
ねりもる猫の声かなや軒の花　卓袋
一日も花見のあてや旦那寺　沾圃
八重桜京にも移るゐなか哉　仝

若葉

濡縁や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪
ゑのの節やら沼の若菜から船　曲翠
夕波の船にきこゆる雁かな　孤屋
一かぶの牡丹もさかぬ若葉哉　尾頭

梅 附柳

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉
幾さしやちらし柳もせはきの花　野水

守梅のあそび業なり野老賣　其角

里坊に雉きくや梅の花　昌房

投入や梅の相手は蕗のたう　良品

一淵備の庭なれ梅のさかりは　曽己

あらし紀 羽多藻またし梅紅　万乎

為る雪や梅の際まで下駄の跡　魚日

まつ梅やさらしうる手ものちよかあかり　千川

霞所や梅の木のちかひきくそて築ん　大舟

天神のやしろに詣て

多くの流までおろや梅の籬さん　遊糸

ほれし孔雀のなりや世之柳　千那

附しきあまうちわり川やな義　意元

ちか道を教へちかうや古柳　江東 李由

青柳のしだれくゞれや馬の曲　丸之江

鳥　附魚

鶯をうけてる葉過る梅か枝　巴丈

蛍よも刀かく波蘂塵(ナケシ)ヶ峯　其角

うちひさや野も堀越の風呂あかり　史邦

蛍に手もと侍らむかしかな　知月

蛍や稲のしろ蘇えにおく　芭蕉

雌雀もおしけなく雛のあそくか　去来

まちゐや箕にほゆらん雛子のあらし　洒堂

駒ゐるの月のさゝやまた川にゐる猿か　傘下

こ滝ゐる花さき紙合し己白泥色　長紅

燕や田をわりかへる鳥の影や　野童

巣の中や身を細して母や燕　(少年)峯嵐

雀子や姉まゝしひし雛の棹　槐市

鶏くらになるく雀乃子飼ふか　河瓢

引鴨やちる風にはなれての残惜く　駒帯

芳野も西河乃蛍

鮎の子乃しすさ流し蛍の音　土芳

かけろふや草よりわつく小鈍か　圃水

しら魚の一かたまりや汲ながら　子珊

白魚のしろさよ鳴もはかなへし　山蜂

深川にあかりきて

しら魚を啼るひ笑ふる四手かな　真角

まちかねて

かへりても霞る川せ渡や春の草　正秀

ゑんるよや松につけたる鐵の道　しけ筋

春の野やかつれの草よりかかれなん　羽紅

川淀や淡をやすむるあしの角　猿雛

青の香しろやき葉の色うしろ　園指

味ひや桜のうへにうめかさね　車来

蕨をも咲出すのも思ひあたり　荒雀

塩みおりいひふくされしきもれかな　馬見

踏おくれ土堤の切目や落の瀧　拙候

ぬらしかれ形に見られ土大根　乃龍

早蕨や笠とりてこの根ましてこ　正秀

こゝろ新色のあかひに肥るこゝろかな　夕可

日のさすに猫の抓出ス尾櫻居芽け　一桐

蒲公英や菜の手に見えくる花さくり　圃茄

猫恋　附胡蝶

恋ころや月になき淨猫の恋　探丸

うは恋にくゐてや猫の盗喰　支考

おもひよる孔星ふける野猫け　ミノ　已百

白月志川ゝや

とまりても翅を動く胡蝶哉　柳梅

衣ぬぎのくさまやさゝき鶯の羽　惟然

蝶の舞おつる様にうつくしさ　園指

風吹に舞の姿うつる小蝶かな　志羽　室朴

立飛して花み錯りし胡蝶け　雪窓

春鹿

振おとしりや膚疵の鹿の角　沢雄

春耕

好猫のたゝきおあてゑさきて麻　木芸

苗札や笠縫とよ花春月ね　此筋
千刈乃田をかへすや難波人　一漁

桃　附椿

白桃や吉川くも落花水の色　桃隣
金屏をまさに盡なり桃の花　介我
依凡々や茱萸の上の棗のむ　雪芝
梅はくり中をとあるを桃の花　水鷗
花さそふ桃や哥舞妓の脇躍　其角

江東の李由か祖父の懐旧の法会にわたのし経文題にて弥陀の光明と以ふ事を
小服綿に光をやどす法の花　角上
植置て枝て庵に花咲椿かな　珍香
取あけて見るや椿のおくの底　洞木
ちる椿咲まりあろそれ猿て見る　野坡

欵冬　附躑躅　藤

山吹や垣に干たる菜一重　園梢

田家乃人に對して

山吹も茶ろ〻祭る花　歸かまん　洒堂

婦おこしはくし花様や蝶のよさ　雪芝

家鷄や穂麦にかくれ藪の花　荊口

春月

山の端をちらしく見なり春の月　長崎 魯町

春雨附 春雪 蛙

抽よりさし草の社やや春の雨　荊口

咲まし調子合はゝは春の雨　乃龍

春雨や虎丸あるゝ蘆かゝり　游刀

ちるふかしら馬に武江の旅店をまかる時

春雨や枕く川るくくひぶ　支考

春雨や出んまくらふ船宿の題　桃首

渋雨や日に返るくれる花盛　風麦

引はくや嫁の着る石乃直(コリ)　風瞭

汐干

乃あり杭の濡ぬるゝぬ汐干かな　去来

品川よ富士の影あるよそほひか　闌指

雑春

出かゝりや西よりそれる紙帳　許六

若葉の雨やすゝき動る桐乃苗　風睡

黒ぼこの松のくらさやわか緑　土芳

うけらふや霞の腰の掛ちから　配力

山吹花のちるや瀬治家　万乎

あらし毎に稲荷やまろや帝れ中　苔蘇

木の芽に川雁からびやぬけ毛　均水

東山の日や嵯峨の木の中れ宿ひ花　正秀

三尺の鯉もなるゝ庫裏の池　仙化

引うれ中の宿るや田螺とり　支浪

三月尽

腰ぬけの白酒売も名残かな　支考

歳旦

若水やまたれ川けりよ為水　少年 武仙

蓬萊の手すさひ立所汁　百歳

若や親に見せての置洗　尚白

蓬萊の日さつひきし螺の貝　圃角

母方の紋めつらしや束ね船　山峰

法ま了友名前を顛倒させしに手まを文の文字出逢し待れへ

元日やおわふらさ衣のうら表　千川

人も見ぬ春や鏡のうらの梅　芭蕉

明る夜のほのかに嬉しよめが君　其角

楪の世阿弥まつりや青かつら　嵐雪

若菜やたちむかひて松の陰　去来

鴬に橋みすまする梅よるな　土芳

去年までもよく住てたる世間に　風騒

冬年一孫をまうけて

元日やまうし隣から梅の花　猿雖

子規なきす川越領やなかれ〳〵に　蔦雫
背きらう柳に抱きつきたやつたの其　野竜
嵐孕の花れて乙尼の鋼のほろき　耕雪
魅の薯のなき手をおもしろし伸　左枝
方川夫や手も見る後の宮比丘尼　前川
枇杷の葉のかしらは揺や雨あ　斜嶺
世の業や鮮きあれとも花勇　山降
濡いろや大かたけの納自敦　任行

え月や雨ちろかこよ稲の花蕊　竹戸
我ちね色うつれ横すえかなり　是示
搗栗や隣ぬやしつれる花のあさ　沾圃
鱼おしのる花目に似たり落やうし　圍角

夏之部

郭公

暁の雲をはなるゝやほとゝきす　其角

ほとゝきす鳴や湖水のさゝ濁　丈草

声〳〵渡や何を木陰にあるく（おます）　角己

蜀魄鳴ねは起なし鶏鳴山　支考

鳴勝の名のや防里あかなほとゝきす　如雪

燕の居ならしむら〳〵やおとく寄床　芦本

淀よりも勢田になけかし子規

けるを　さゝ山の杯屋にて
順礼乃吹しで通りけるとや

郭公かさゝぎの森や中やとり　沾圃

木　附　草花

橙や月みるかれころ二つ木立　園指

里しの姿かはりぬ菊川あさち　野荻

園中　二句

此中の古木を吹川れ梅の花　此筋

手折のたき木も梅の気色ふ外　千川

姫百合や上よりさかる珠の糸　李龍

題山家之百合

あらしやとゝまる溪の百合花　支考

山もとのかれて咲花やさつきさ　尾頭

冷汁をなくすましけり桔梗花　沾圃

手のとゞかぬ傍ふかれし杜若　イカ　宇多都

二またや茄子の花さへ先さく　措候

もゝ瓜の尻矣

昼かほや月さへ見れば花盛　沾圃

夕顔や酔てかほ出す窓の穴　芭蕉

夕かほや裸ておきて夜半の月　三人　嵐蘭

藻の花をちらして寄る入江かな　孫香

蘭の花にほひしみたる溜り水　さ前

蓮の葉やみかへる水を離れ　白雪

客あるじ共に蓮の鑓かな　良品

瓜

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

姫瓜や袖に入ても重からん　至曉

忘れたる膳をむかれぬ杜丹かな　風法

子篇

三日月に草の蛍は晴よかり　野荻

納涼

涼しさや竹握り切る藪のしひ　半残

町葉花や屋形にむかふ夕涼　唯然

淀川の夜舟にて

まくらや新茶や風もよらぬ船涼　史邦

涼しさや橋の藪もその縄手から　呂翠

石ぬしや裏門明て夕涼み　長崎 牡年

京入や鳥羽の田植の帰り中　長崎 卯七

早乙女に結んでやらん笠の紐　園指

ぬとる男の植おくれたる雨間外　魚日

田植唄まてかる声の諷ひ也　童行

一田づゝ行めぐりてや水の音　少枝

里の子が燕握る早苗舟　支考

蛍

段々火の媚るゝてあかるくな　許六

涼しさに牛は尾振て川の中　万年

漫興三句

腰かけて中に涼しき階子かな　洒堂

涼しさや様より足をぬらしけり　支考

廿碎をふらせてみたる涼みかな　雪芝

まよひ入るを
茅屋にまよひきて

涼風もおもしと竿のこはれけり　游刀

ゆるかし舟中をぬけたる涼み船　全

立倚りく人はまたれてすゞみ哉　去来

黙猫子よこまる涼しさや石の上　正秀

職人の帷子ころも涼みかな　土芳

涼しさや一足羽織の風あたり　我眉

南涼やむかひの谷も月さかす　里圃

盃ニ辺

かたちや照りかゝまし庭の隅　野萩

李盛る世のあつさの暑かな　万年

表醫者のいさゝか兄やさされし
よみて侍る
家内のも其涼て寐冷の暑かな　正秀

瓦葺の内のあつさや梓はらひ　乙州

螺さゝる白塩ほつし素麺新　怒風

茨伸ふ垣もしけみの暑有らし　尾張 素覧

草のいやや暑き月にきかつ尾　我峯

ほつよりや三扇きらさん手肥布に　戸芸

積あけて暑さいやまるなか　卓袋

粽なから鮑もおのほつさら能　里東

立のまれ出せり川ともやの暑かな　沾圃

弁のゝ子

菊に出そめ岸の能なり　可誠

更行や姻の山川る蓮葉の窓　曲翠

五月雨附夕立

嵐やゝまくもやした徹の中　出羽 不玉

さゝられや堅蟹ふ葉乃姻　芭蕉

五月雨や瞳ふられぬ雁たゝひ　治圃
夕立やさし合まり白傘　拙候
白雨や蓮の葉ふくゝぬく池の　江戸 苔蘇
夕さらやちらしけふる竹の波　暁烏
吹かへされ傘かる宿やまつ所　圃水

蟬

白雨や中宿りして蟬の声　正秀
きし川を涼て蟬て去かり蟬の思　胡故

森の蟬涼しおもひやはつきあり　乙州
蟬鳴やぬの撒る家の茅か附ふ　暁烏
この川を
秋の月や潮こえてる津鐘　葦拾

雑夏

不意蜂して手の動や世團ゝ子　杖風
舟の暗ふ夏葉やあれしや寺子畑　荊仁
夏痩も祢ひの中の去とりなり　イセ 如真

川狩にいでて、

しら焼や麦かくし置て梅鰹　文鳥

畢竟草にまぎらかしや園の菜麁　蔦雫

夕顔もなかりしものを志らるや酒まゐし　水鷗

なくさむところにきて母をやしなひて

魚取ある筆も流れ涼しさハ　馬莧

梅干さて筑かさねて目の面　雲翠

澤潟や道付るゆる出のあと　野童

蝸牛たのもしげなき角ふりて　水鷗

晋の淵明をうらやむ

窓形に昼寝の台や簟　芭蕉

粘ごはな帷子かぶる昼寝かな　惟然

貧僧のくらしも見えず蚊のなき声

ねぶくよすがなふたにぶりの日の

納涼も扇一本にして世を寄る

帷子のすそひきやすし銭五百　支考

穐之部

名月

名月に拭の露や田のくろまでし　ちう八

名月の発句を見て桃隣
くりしき伊賀の山中にして名月の
あるの二句をなしおきしてこれは是
いつれか非ならんと待しに十月わり
つくしに月を中川ゑ猿の爺え
それみなさたる宮あるつよ娘附句

くさと園位なしのかとりやさしさ流
枝葉も二方横ほとりなかれて平田
渺々と思ふところも老杜か唯なら
ぬのみならすいふにもかたくかなる
へし乃此後の棉をうけも言葉
篇にして心をあやかりけて今の
このむ所の一篇に信あらん月乃
うつしはやきたるもののきを流れ
ものらうたちにとおもひやられ
いまたよ清香あり月に隠ありて
是も清き興のあそひそれすさまし

先前ハ寂寞をもてなし法も風無き
も川をしもの且五のみ何乃是非を
あらそふすをかききせきく後の人
なりおるへし

支考評

名月の海より冷る田簔の舵　酒堂

明月やおのかくれを餞のつき　如行

そのしほん根まさん月見かな　露沾

姥ゝ河あつさいまはひやさむらの月　智月

名月や長居の隠さ人の顔　閑指

明月や更科より花や中さ客　凉葉

明くや一所成人捨る隠もなし　不玉

井切乃梨子手の住く見ゆ　配力

名月や草のくゝり白さなれ　左柳

明月やきさえの松の人もなし　園水

松陰ゝ乱もなくてうかがひの月　正鋒

明月や霞ぬ空をま門さか次　風国

名月や四人乗し艀ゆらゆら　需笑

老の身もと宵の月も内てらし　室女

明月にかくれし星の哀なり　泥芥

遊女の面に宿ありてかゝるの詞をおもひ出しける

二人まで身は花の河越ゆ月見かな　支考

芥子蒔と畑まで行く月見かな　空牙

柿の花不聞とまつに月の秋　如真

山ふる紀ち川とも霧敷や峯の月　宗比

名月や里の西ひの妻手呆　木枝

場に居て月見なしや遊様　利合

明月や都かはし江女中方　丹楓

明ぬとも何もおろ花お子の道　野荻

飛入乃客よ手鏡ぐ川月見汁　正秀

淀川のほとりにあそびして

舟引のもさかさよけて月見汁　丈草

待宵の月に淋しや宗那卿　景桃

家に三老女ともにあり三交
物盗ら秘して待ち待し
きれとひもて

姨捨を

闇よのあふやにの月　浩圃

露おきて月入あふや姨の峯　鳥芝

するうつゝ月まさかぬ梢汁　里東

月影や海の青の毛二扇下　牧童

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友　芭蕉

十六夜はわつかに闇の初かな　仝

ゆきあひの闇の名もなしそらの色　猿雖

七夕

こよひやも雲の上のあまの河　唯然

星合をさへて待ぬ朝からす　涼菟

船形の雲もちらしやあけしめの空　東潮

あさまさをいとふる神よゆきの下　沾圃

秋風や薫姫の闇もちら　乙州

立秋

雲ねらや手に情よそみの秋　露川

秋の川や中に吹かるゝ雲の峯　左次

稲妻

朝露の花透とほる也桔梗かな　桃隣

細工にもならぬ桔梗のつぼみ哉　徑友

女郎花ねびぬ馬骨の姿かな　澤子

まさなくも鶏頭の枝にうめかれぬ　馬莧

一筋を風にまかせし蜩かな　烏栗

弓固ぐる比なれや露まくら　支浪

贈芭蕉翁

百合もるに葉蕨を報ずる余りかな　風麦

はつ姫のなすてても淋しはすき記　支邦

枯のまゝ草ふるを抱うしや鶏頭花　万年

鶏頭や雁の来る時なほあかし　芭蕉

鶏頭の秋る度ごとの月夜かな　至暁

折しや雨にさもしき萩の露　雪芝

芳花草ふや起きて動く秋の風　荷兮

山人の豆腐すゝむる鳥の声　加賀山中　桃妖

風毎に長くなりけり鶏頭花　杉下

鶏頭花

鶏頭の花咲かゝる人の後ろ月夜　田上尼

あさがほの這ふてしぐるゝ松かな　閑指

みそもはさうしやうもて湯の舟　風麦

朝顔にしをれし人や鬢帽子　其角

虫　附鳥

きりぎりし死傍に経よみかゝる　女　可南

竈馬や顔に飛つくぬかゞ棚　小枝

火の消て胴よりかゝる虫の声　正秀

秋のねや夢と覚ときりぎりす　水鴎

みの虫や形に似合し月の秋　杜若

蟷螂や何の味ある草の花　探丸

蟷螂や腹をひやするいしの上　葛森

蓮の実に軽さくらべん蝉の殻　示峯

ぬけがらにならびて死る秋のせみ　丈草

鳥どもに吹るゝ浦の友千鳥　馬莧

鶺鴒や走り尽たる白川原　氷固

粟の穂を見あぐる時や啼鶉　支考

老の名のありとも知らで四十雀　芭蕉

穐風

秋かぜや二番たゝぬに世の時　游刀

雀子の髪もしらがや秋の風　式之

何なりとかゝへし行秋の風　支考

松の葉や細きも揃秋のかぜ　風国

きのつまる草のまへ人手にかゝり　圃燕

ぬかんこもるや雨にさふましら聲　丸江

あれしして来る海より雨分る哉　猿雖

稲妻

独ねて留守ともしらじ稲の殿　少年 一東

稲妻や雲にへりとる海の上　宗比

明ぼのや稲づま戻る雲の端　土芳

いなづまや闇の方行五位の聲　芭蕉

木實 附 菌

団栗の落て飛けり石おとけ　為有

炭焼に澁柿たのむ便り哉　玄虎

秋空や日和くるはす柿のいろ　洒堂

はぜ釣しやつ帯をもろく椋の汁　子相宴

まつ茸や塩にも漬ず一盛　作圃

伊賀の山中に何某の
茶店を待ちひて

松茸や都に近き山の形　惟然

まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

楓

後の塀にさゝれたり村の家　小鰹

簾

庵すだれに起風の簾や風の音　風睡

簾かゝるに簾押さゆる明けずくゝ　一敵

農業

起し置人を逃けり驚妻の沙　車庸

木の下に猩やむかふ穂鯛の稲　買山

さなへにけふもあらずして崎寺の稲　如雪
山鵑の牛従よ
らずとられて

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉

早稲刈て落つかぬや小百姓　乃龍

山雀のさゝやかに鳴一霜の稲　斗従

落りかゝる河原に鶸むら粟畠　支考

一霜の寒さや芋乃さしんと刈　仝

肌寒き始にあかし蕎麦のくき　惟然

百なりていくつら抜そ唐からし　李由

大悲河原にあそびて將監といふ人の縁にあそひ侍り

そのはるや一風凡土きし花の種　治園

菊

菊草二百十日も恙なし　蔦雫

盛りしはやちといふ菊の玉牡丹　潤子

黄木錦の霜下に咲し菊の花　支考

題屏風

咲こもるやおろす山路の菊の露　兀峯

借りかけし誰の眼やかの菊　此筋

暮秋

虎渓や背負ふて帰る秋の雲　野水
行秋を鼓弓の糸の恨かな　乙州
行秋や手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雑穐

又六十海をこしてや鍛一ッ　之道
白菊かゝれ也家作する松の中　團友
あら鷹の睨みのちからにおもはるゝ　畦止
待る般や忘れ間ある秋の雨　呂丈

勇ましやひに露のこぼるゝ菊ゟ　荻子
寝ころぶや稲こく家の菊畠　万平
柿の実に蜂さして盛ん蔦着　東門　宗波

むかしは馬ゟ宿に髑骨やしもの箇鼓ありけるを尋て聴ほなき盡て鐘声の煙り
うきよりおもしに生前の
うみかへれなとハラ死あそひよ
辞るんやかの髑髏を穐
かりして露よ息をつく

かくさるも只との生ものを
きのふさくらしものかゝり
稲つ庵やうおのかへろう蔦の植　ちとせ

冬之部

時雨　附霜

此比の垣の結目やはつ時雨　野坡

しくれ音も又松風の只さへも　小枝

けふはかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨そのこと川まろく月影か　露沾

初しくれ中橋の草紙着かに蔵　馬莧

平押によき酒しもろ附るなる　野明

葉賣やかゝえ志られの岸迴り附る　嵐指

椀賣もわよ茸の秋附る　空牙

亢鰹の出て見ろ也附る船　為有

宇多わや饒のつる一しられ　鶏口

為に垂て秀蝋を始る屋附る介　野荻

柿包む日和もなしやいる附る　露川

宇ミ〻り志られて星も露條附ぬ　里圃

隠やききのつのまきき月のよしく〻くそあれかりけれ

沖西の能目くり出居附る船　沾圃

ちり舟わや本の出かくれの縁　小鯤

龍とつるや一つふくし花と能の瓷　支考

元禄辛酉之秋

九月某堂菊園之遊

辛酉の雷を挿む月のひかれ

まりけ傍うちすその出きてれ

ゆかしめく〻もかく次て菊も

むかし附句を猿と云体たく呂
予がもと川が展重陽のしめし
かなれしもあらねちか秋
菊に孫して人々きすむ
れける文をかりぬ

菊の香や庭に切れたる履の底　芭蕉

柚の色や起あがりたる菊の露　其角

菊の気味ふかき境や藪の中　桃隣

八専の雨やあつまる菊の露　沾圃

何魚のかざしに置ん菊の枝　曾良

菊畠客も圓座をかりにけり　馬莧

柴桑の隠士無絃の琴を弾じ
きをめでゝ菊も輪の大ならん事を
好まざるさまもとめんなる
をし今その菊をまなびて
そのつくりなせる花をと見
家々に菊作りて朝夕にしばらけ
ころにあらんやとて人見竹洞
老人菊の園を遠ざけられしより
是なん夕菊のしたひて
あるじがほしかさに聴きあるき
風なきて扇あらせて

うつしゑぬ翠や作らぬ菓のな　東堂

草

水仙や練塀われし日の透き　曲翠

なを清く咲や木の葉からの水仙花　氷固

水仙の花のこゝろや葉かるしき　惟然

花暴鍮ヶ趙南のちらぬかな

山家集の題よみかへて

一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉

山茶花さえしより開く帰り花　車庸

冬梅のさと川端川や鳥のあそ　土芳

山茶花も落てや雪の散椿　露笠

木の葉　附冬枯

おもひなし木の葉ちる夜も星の数　沾徳

日生きんて江の鞘もうらなる木の葉　露沾

冬川や木の葉は黒き岩の間　惟然

榛より足さはりよき木の葉かな　枳風

ならの松陰宗比の
庵をとひ侍て

きのふより先見てとをる落葉かな　杉風

枯なでゝ霜おちらばや咲し人　イセ 一道

牛のゆく道まで枯野のすゝきめら　桃酔

冬枯に吉ちてんくるなかれ　乃龍

草枯に手くり川て聞鵯もなり　利牛

鵯も枯てのこる掛かし雲雀の背　支考

木からしや色にも見えず散もせず　智月

凩や背中吹るゝ牛のあゆみ　風竹

木枯や刈田の畔の鉄気水　惟然

こがらしや葉まきちらる牛の角　塵生

夷講

ゑびす講酢賣に袴着せにけり　芭蕉

ゑびす講發も鴨に娵まり　利合

鳥 附いを

乃やゝの海まきて

塵浜にたゝぬ日もなし浦鵆　句空

追かけて寛にかゝふ千鳥の声　蔦雲

小夜ちとり庚申まちの船屋形　去來

入海や碇の竿に啼千鳥　闌指

氅（ケゴロモ）につゝみてぬくし鴨乃足　芭蕉

ゝ川鴨を犬追かくるはしゝかな　作木

投汐にころひのつよ生海鼠かな　二人 利雪

うらしやゝ海月に交るなまこ汁　車庸

えゝ透や子持ひゝめのうれ氷　岱水

一塩にはつ白魚や雪の前　杉風

かくぶつや腹をならべて降霰　拙侯

杜夫魚ハ河豚の大さにて水上に浮ふ
越の川にのミあるよしなり

冬月 附衾

唫ミの中や門賣ありく冬の月　里圃

あら猫のかけ出る軒や冬の月　丈草

何支りし霜入るまでなり鉢敲　少春

千仏や行をわすれし江の月夜　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉

侘しさは夜着をかぶるか火燵哉　少年　桃先

自由さや月を見ながら寝る火燵　同木

雪

初雪や門に橋あり夕間暮　其角

ゆきゝや有明すさき酒の味　仝

雪あられ心のかはるみそさ汁　夕東

鷦鷯うめをどこそかくれ雪　祐甫

雪垣や去られぬ人の家の前　萬乎

娵くつ子もよき鞋を出ぬやりの雪　支考

片壁や雪降りかゝるすさ俵　園吟

思ひ入のなるんや月枝のおかね　丈草

髪な剃も降る雪ろ比らのけ　陽和

伊賀大和ろきれる宿や雪の花　配力

神楽

あや和に蔦も吟まあね寒けれ　史邦

待出しよ

合歓やうなしろ下手の辞知　路草

待をかくに千躰覚をすあるり　馬莧

嫁入の門もちれき待出しよ　許六

猿を送りう尻り辞おしき　浪圃

煤掃　附　餅つき

煤とさや鼠追出す鴉の中　孫香

煤掃やあへ湯のかあらきを旅　黄逸　涞鷺

半なな儀のかんや煤はき　馬莧

煤はきやわすれて出る鉢ちさき　ミノ　闇如

煤掃や折敷一枚踏わるる　惟然

餅つきや火をかいて行男部屋　似水

餅はきやあくるもの日ころ鶏の　とや　嵐蘭

もち搗の手傳ひするや小山伏　馬佛

歳暮　附 節季候 衣配

こゝろくに道もはたえの市のうち　魚日

門跡やおきて走る手の洗ひ髪　里東

賣るやとれても今年の暮　草士

猿も木のをりもさへやとしの暮　車来

大年や歎子もさもしく指折ひ　万手

褌きぬ無年のもありとしの暮　李由

年の市誰を呼らん羽織どの　其角

すゝきたに小豆も市のはやさかな　正秀

引結び一はし紙やとしの暮　荻子

桶の輪のきれしもあはれ年の暮　猿雖

天鵝毛のきぬさらしかして峰の雪　惟然

傾荻に葉を持せてかくしの雪

けふそ圖司呂丸が羽黒より京に
のぼるとて伊勢にもまうで侍りしに
いさのかしこのふるかはらけもおひ
出して今またなゝ人とまたなりし

盗人にあふた夜もあり年の暮　芭蕉

余所に寝てどんすの音をきゝしこゑ　支考

漸に寝所も身ぬ年の暮　士芳

鳥羽帯や弱りて雪の鶯の声　高白

鳥羽帯の振子ながら振袖かな　少年 桃後

裁し着き来の子らが川きる配　山蜂

一声さき隣て静れし除夜の鶏　利合

雑冬

小屏風に菜を挽ころ寒さかな　斜嶺

枝行の冬の風さわしはしの端　士芳

井の水のあたゝかになるさむさかな　李下

鶯や山伏村の長ばなし　仙杖

霜ばしらきの湯けむりや　土龍　圃仙

火燵より霞の朝は明にけり　雪堂

山伏や猿が尻掻く冬日向　コ谷

短夜は人参の根のさむさかな　佐圃

草刈や冬ごもりく影の雪新　杉風

釈教之部　附 追善　哀傷

涅槃

涅槃像あらは貴見る鬼めくれ　法圃

猿さへ命や毅手合す涅槃の前　芭蕉

山寺や猫守りて寝ぬ涅槃像　不撤

貧福のまじはり見ゆる涅槃像　山鋒

灌佛

灌仏やほうしかゝる梅井戸のやね　曲翠

蒙花や仰かまれて二三月　不玉

灌仏や釈迦と提婆ハ従弟どし　之道

魂祭

吟物もえなれぬし踊まつり　嵐雪

尋ゐるのかさしやうき魂祭　去来

常陸像や墓へこはたとふ玉祭　洛圃

甲戌の夏大津に侍しをこのかみのもとより消息せられけれは旧里に帰りて盆會をいとなむとて

家はみな杖にしら髪の墓参　芭蕉

悼少年　二句

かなしさや麻木の箸も折もなく　惟然

その親をしりぬその子は秋の風　支考

はゝくも死詠草に添て

青の花ち稲妻のさしかゝるのかゝ　木節

さゝゐや稲妻やどる桶の水　支梁

法縁

柚も柿もおもひおかれけり法縁　洒圃

臘八

鶻もさくりて入れし納豆汁　許六

何のおれかのあひりけり大師講　如行

雑題

洛東の真如堂にして

善光寺如来開帳の時

涼しくも野山にみつる念仏哉　去来

みさをおもひや二なさしけりけしの花　智月

はし蜩や家も所もありて在世　乙州

その日にハ川越向ふや冨士まうで　丈草

手まきもしに朝の月涼しさ念仏哉　野坡

食堂に雀啼なり夕時雨　支考

旅之部

送別

元禄七年の夏はせを翁の
別を見送りて

麦ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

わかるゝや柿喰ひながら坂の上　惟然

許六が木曾路におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より古郷に帰るに付

嵐やとても芒の草ひきたばしけり　丈草

鮎の子のしら魚送る別かな　芭蕉

甲斐の山中に立よりて

年よりて牛に乗りけり菊の花　木因

稲つけて渡世をたつる縁の山　卿人

あへもなくつれだつ川瀬や旅の宿　野径

越の国におもむく時

ゆきかへる谷地なり けり中の秋　乙州

十團子も小粒になりぬ秋の風　許六

大名の寝間にもねたる夜寒かな　仝

とらしたち草の露そふ別盃の旅　卓呂

はなれても土て家居する木曽の秋　猿雖

晴れのそらに向ひて旅姿　我峯

おもひしれ手にふれ袖あつし京の馬　史邦

四国の巡も衛し伊勢の
くみくみありて

文台の扇ひらけば秋涼し　亡人　呂丸

我庵は(?)園にして猪の寝ぐら哉　浩圃

常陸の国なにがしあひよらふ所に
行暮てやどり求んとせしに
その主さだめてあるじとて　たるを
きゝとられて一夜別けの軒の
下にかりより
出して

稲の露情や梅に豆粥　支考

夜川のや道はさらふ杖もと　仝

元禄三年の冬粟津の草庵
より武江におもむくとて嶋田
の驛塚本が家にいたりて

宵かりて名をやのこさん
しくれ哉　はせを

續猿蓑ハ芭蕉翁乃一流乃手え
何人の撰にもあらす翁遷化の
後伊賀にて翁乃兄松尾氏より
此稿子あり集に載らせ書を得て
漸くに草稿のまゝなりけるをあらはせん
世に廣くあるらんとゆゑし然るに書中
或ハ墨けしあるいハ書入になりては
くたりは草稿の手なりしに侍り

一字ほうえす一切とあられ候すそ
乃書たち手紙をもって世に梓行
せるを趣之

元禄十一寅

五月吉日　　かつか一陸京筆